

三日を初もつでの日と決めて、氏神の神田からあがる米のうち一斗三升を餅にして神前でまいた  
うい。

はじめはこの村も似たり寄りだつたか。清水町や上河内も神田があつて、もち米一升を  
お鏡餅にして、一ヶ月一升の十二か月分一斗二升を小餅にして参拜者に撒いたのである。

もとは、数え年の二十五の男が一人前になつたことを披露して厄を払う行事で、すべて男性が  
取り仕切つたものだ。四十二、六十一の厄男がまくところもある。

青年団活動の華やかだつたころは、勇壮だつた。揃いの法被に腰縄姿の前厄が、まゆ玉を先頭  
に、餅を詰めた大きな耳桶を青竹でかついで、村道を練りながら神社に向かう。沿道を埋めた客  
にお神酒をすすめ、いきおいで胴上げをする。そのうち本厄の男たちが、羽織袴すがたで餅つき  
の宿を出て、神社に向かい、拜殿で厄年の女性も一緒に御祓いを受ける。

そして、厄男たちが棧敷に並ぶころは、境内は人でうめつくされる。高い石垣の上からまくと  
ころは、大きな厄餅をひろおうと、若者は石垣によじ登つた。午後四時、拍子木の合図で餅はま  
かれ、人並みがゆれた。

米集め、米洗い、餅つきと長い準備にくらべ、クライマックスは短い。人々の去つた境内は静  
かに暮れていく。

時の流れで、おこないのやり方も大きく変わったが、今も十三の全町内が賑わつのである。

### ④3 天保のききん

江戸時代、天保の年（一八三〇年）になると異常気象  
がつづいて、六年から八年にかけては最悪だつた。大雨の  
降り続く冷たい夏、大風も吹いた。稲は実らず、虫がつき  
腐つた。

人びとは、草の芽や葉、葛の根、木の根も掘り尽くした。  
豆の葉、柿の葉、松の木の皮まで粉にして団子を作つた。



いろいろのまわりに敷いたむしろにごびりついているご飯粒を、水でふやかして煮て食べた。

七年には別司で打ちこわしがおきた。八年には疫病もはやった。河和田の谷で五百人ちかくの人が死んだ。絶えた家も多かった。

米の値段はあつという間に四倍にはねあがった。たとえお金があつても米そのものが底をついていた。百姓も今日を生きるために、かえすあてもない金を、なけなしの土地を担保に借りたのであった。

椀作りの片山は人口の割に田畑が少ないので、鯖江藩のお救い米に頼っていてはごうにもならなくなつた。村には、その昔男大迹皇子からもらったというお墨付きがあつた。この村の宝を、川島の庄屋で稗三儀ととりかえてもらつて飢えをしのいだという。

上河内では、鯖江藩におさめる年貢米がないので、柱松の山神様の樺の木を伐つて代わりにおさめたそうだ。

つうしたききんのたびに金持ちはますます土地をふやし、貧富の差は大きくなっていったのである。

#### ④4 拓かれた野

継体天皇の皇女茨田姫が、尾花に住んでおられたころ、河和田は、荒地や沼が多くて人の住めないところが多かつたのです。

茨田姫は、みんなが住みやすい土地にしたいと、村人に野原を開墾するようにお命じになりました。

そのころ筋生田は、一面雑草の茂る荒地で、大きなうわばみ(大蛇)が棲んでいました。

さて、いざ、開墾しようとして筋生田に来てみると、ちようびうまい貝合にとぐろをまいて眠っていました。

「しめしめ、よう寝ていびるぞ、早う草をかって、このまわりにつみ上げよう。」

そして、草に火をつけると、うわばみを焼きころしてしまつたのです。

